

奈良・京都盆地における中世温暖期にかけての 古水文気候環境復元

丸本 美紀

I はじめに

古代、奈良盆地では干ばつが多発し、そのため多くの溜池が築造されたとされる。一方、隣接する京都盆地では、洪水など大雨による災害が多発していたとされる。両盆地は標高120mの丘陵で隔たれているにすぎないが、古代より異なった気候災害が起こっていた。その理由の一つとして、奈良盆地は小河川しかなく、京都盆地には鴨川、桂川、宇治川等の大河川があったというような地形的要因が考えられる。しかし、干ばつ、洪水を引き起こすのはいずれも少雨、大雨などの気候要因である。そこで、両盆地における気候の違いや気候変動などがこれらの災害において何らかの影響を及ぼしていたのではないかと考え、本研究では中世温暖期と呼ばれる世界的な温暖期(西暦800年~1200年頃)とその温暖期にかけての気温上昇期(西暦600年~800年頃)における奈良盆地と京都盆地の気候環境を水文気候の観点から復元することを研究目的としている。

II 研究方法

本研究では、以下の3つの観点に分けて、気候環境復元を試みる。

- ① 奈良盆地と京都盆地の気候特性の比較
- ② 西暦600年~1200年頃の奈良と京都における古気候災害
- ③ 西暦600年~1200年後頃のグローバルな気候変動

今回の調査では、①京都盆地の気候特性と②京都の古気候災害について、京都市歴史資料館、京都府立総合資料館、京都府立図書館で資料収集を中心に行った。

III 研究結果

京都市歴史資料館によると、京都は古代から毎年のように鴨川が氾濫しており、そのため、疫病が起こるなど、

平安時代の京都は決して平穏な時代ではなかったという。平安時代の京都では、これらの疫病や洪水は怨霊の仕業であるされ、現在も行われている「祇園祭」も元々はこの怨霊を鎮める為の「御霊会」から始まったものであるとされる。一方、京都盆地は堆積盆地であるため、伏流水が湧き出るところが多く、この伏流水が湧き出た泉を利用してお茶やお酒、豆腐など水を利用した文化が発達したとされる。このように、京都では「人間」と「水」の1,000年に及ぶ「戦い」と「調和」の繰り返しであったという。

この他、京都府立総合資料館、京都府立図書館では、今後気候データ解析を行う際の参考資料として、京都の自然史や京都の気候に関する郷土資料を入手することができた。

IV 今後の課題

一般に、奈良盆地も京都盆地も同じ瀬戸内気候と盆地気候に属する。瀬戸内気候は夏の少雨、盆地気候は気温の年較差・日較差が大きく、風が弱いという特徴がある。では、奈良盆地と京都盆地の気候特性の違いは何かというと、夏季の気候である。奈良盆地の夏の気候特性は干ばつ、一方、京都盆地の気候特性として夏の蒸し暑さがあげられる。この京都盆地の夏の蒸し暑さは、「盆地で風が弱い」ことが原因とされているが、これは奈良盆地においても地形的には同じ条件のはずである。今後は奈良盆地と京都盆地の気候特性の違いについて、現代の気象データから数値的な比較を行い、要因を調査していきたいと考えている。

今回、現地調査にあたり、自然地理学奨学金を使用させて頂きました。浅海先生と浅海先生のご家族に心から感謝申し上げます。

まるもと・みき

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻(D1)